

# 11月1日 諸聖人

黙 7:2~14    1ヨハ 3:1~3    マタ 5:1~12a

## 1. マタ

v.6 「義に飢え渴く人々は、幸いである、その人たちは満たされる。」

v.10 「義のために迫害される人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。」

イエスの山上の説教を、その宣教の第一声である「悔い改めよ。天の国は近づいた」(4:17)と結びつけて理解することは、聖書を学ぶ者にとって最も基本的な前提でなければなりません。神の国の到来という終末的希望から切り離されて、いかに多くの人々によってこの山上の説教が曲解されて来たかを、私たちは知っています。そして、それは今もなお決して過去の少数意見などではないことを、心に留めなければなりません。

フランシスコ会訳の新約聖書は、かつての口語訳聖書のとおり同じように、4~9節の文末をすべて“…であろう”と翻訳しています。今朝の諸聖人の祭日のミサで私たちは、“(天の住人である)諸聖人との交わりは、我々をキリストに結び合わせる”(教会憲章 50)ことを思って、神の国を待ち望みましょう(コロ 1:23)。

神がイエス・キリストによって贖いの業を成し遂げられたという信仰に、最初の弟子たちを導いたのは、復活の出来事であって、イエスが地上の生涯において与えた教えではありませんでした。ですから使徒たちは、神がイエスの死と復活によってその終末的支配を、決定的に開始されたということを宣教したのです。

イエスのガリラヤにおける説教を、初代教会が聞いた使徒たちによる宣教から切り離して、常識的な道徳を語る魅力的な物語りであるかのように読むなら、それは全く間違ったことです。福音書は、ジャーナリストが歴史の事件を記録するために書いたような類のものではなくて、キリストにおける神の終末的な救いの“良い知らせ”を宣教するために書かれました。

「ところが今や、律法とは関係なく、しかも律法と預言者によって立証されて、神の義が示されました。すなわち、イエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる神の義です。そこには何の差別もありません。人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。」(ロマ 3:21-23)

「このように、わたしたちは信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストによって神との間に平和を得ており、……、神の栄光にあずかる希望を誇りにしています。」(ロマ 5:1-2)

v.9の“平和”という言葉の意味は、このように理解されなければなりません。

## 2. 1ヨハ

v.2 「愛する者たち、わたしたちは、今既に神の子ですが、自分がどのようになるかは、まだ示されてい

ません。しかし、御子が現れるとき、御子に似た者となるということを知っています。なぜなら、そのとき御子をありのままに見るからです。」

義というのは、人が自らの善い業によって獲得するものではなくて、神から恵みによって与えられるものです。また、信仰によって義とされるとは、神が人間を義であるかのように見なしてくださることではなくて、それは全く神の創造の業です。「キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。」(II コリ 5:17) しかしながら、それはまだ目標に到達してはいません。義とされるとは、神の国を受け継ぐことの確かな約束であって(エフェ 1:14)、「御子が現れるとき」に初めて完成するのです。

「わたしたちは、このような希望によって救われているのです。…… わたしたちは、目に見えないものを望んでいるのなら、忍耐して待ち望むのです。」(ロマ 8:24-25)

### 3. 黙

v.14 「彼らは大きな苦難を通過して来た者で、その衣を小羊の血で洗って白くしたのである。」

歴史の教会は常に、神の国における天上の礼拝へのあこがれをもって、このヨハネ黙示録のテキストを読んで来ました。この「天上の教会とわれわれとの一致は、特に聖なる典礼においてもっとも崇高な方法で実現される」と、教会憲章 50 は教えています。その簡潔な表現を、第四奉献文を例に見ると、次のようになっています。

「いつくしみ深い父よ、あなたの子であるわたしたちすべてが、神の母おとめマリア、使徒と聖人とともに、あなたの国で約束された命にあずかることが出来ますように。」

アーメン、ハレルヤ。

## 11月8日 年間第32主日

王上 17:10~16 ヘブ 9:24~28 マコ 12:38~44

### 1. マコ

典礼暦年の最後の三主日の朗読配分が、私たちの心を特に終末に向けるように作られていることを、今年も再び思い起こしましょう。「あなたがたは今がどんな時であるかを知っています。あなたがたが眠りから覚めるべき時が既に来ています。今や、わたしたちが信仰に入ったころよりも、救いは近づいているからです。」(ロマ 13:11) そのような背景で、今朝の福音書のテキストを読むことが、カトリック教会の信者には求められているのです。

v.40 「このような者たちは、人一倍厳しい裁きを受けることになる。」

律法学者に向けられたイエスの非難は、現代の教会の信者である私たちへの警告であります。カトリック教会でも、近年多くの信者がいろいろな委員や奉仕者になって教会を活性化させることが、試行錯誤されています。言うまでもなくそれらは“神奉仕”(Gottesdienst)の一部であるという建前を、いわば当然のことと思って誰も疑ったりはしません。しかし実際には、それらの活動が人々に評価されるということだけを目的にしてしまっている、すなわち人間に評価されれば、当然神もそれを御自分への奉仕として受け入れてくださる、という勝手な自己満足と自惚れになってはいませんか、反省する必要があります。

v.43 「この貧しいやもめは、…… だれよりもたくさん入れた。」

ほとんどの信者は、“自分は貧しいけれども時間や財を教会活動に捧げている”と、考えているに違いありません。だから、“自分の奉仕や献げ物は当然神に受け入れられる”と、いつの間にか勝手な自己満足と自惚れに陥ってしまいます。

今朝の朗読配分が、終末への心備えという主題の中に置かれていることを理解しましょう。「神の御前で、そして、生きている者と死んだ者を裁くために来られるキリスト・イエスの御前で、その出現とその御国とを思いつつ」(II テモ 4:1)、私たちは今朝の福音書のテキストに耳を傾けなければなりません。

### 2. ヘブ

v.24 「キリストは、…… 今やわたしたちのために神の御前に現れてくださった ……」

現代という時代は、人間の関心の対象が神にではなくて民族や人類に、神礼拝にではなくてこの世の平和や豊かさに、そして神を知ることにではなくてこの世の知識や処世術に向かって、強力に方向付けられて来たと言うことが出来ます。しかもそれは、突然そうなったのではなくて、近代というおよそ500年の歴史を背景としているのです。

そういう時代の中で私たちが信仰に生きるとは、私たちが敢えて“聖伝と聖書を通して神の啓示に耳を傾ける”民である、ということなのです。

キリストが「御自身の血によって、ただ一度聖所に入って永遠の贖いを成し遂げられた」(9:12)という重大な福音のメッセージを聞こうではありませんか。今キリストは「神の右に座っていて、わたしたちのために執り成して下さる」(ロマ 8:34)ということを理解しようではありませんか。私たち人間はすべて、「生まれながら神の怒りを受けるべき者」(エフェ 2:3)であり、本来「怒りの器として滅びることになっていた」(ロマ 9:22)のに、終末のキリストは「来るべき怒りからわたしたちを救う」(I テサ 1:10)ために再び来てくださる(v.28)という聖書の使信を、確かに聞いてアーメンと言える信者に、私たちはなろうではありませんか。

### 3. 王上

v.15 「やもめは行って、エリヤの言葉どおりにした。」

彼女の熱心で純粋な信仰が、奇跡を引き起こしたと考えてはなりません。貧しいやもめのレプトン銅貨二枚も、決してそれで神を自分に都合の良いように操ったということではありませんでした。王上 17-19 章のエリヤの物語りは、「生きておられるイスラエルの神ヤーウエ」(w.1,12)の、力強い歴史への介入を語る伝承であります。

人間がこの世に作り出す平和や繁栄や豊かさに向けての努力に、神の力を利用しようとするのが宗教の役目であって、しかもそれが可能である……、という得手勝手な幻想を捨てることを、カトリック教会の信者は典礼暦の最後の三主日に、毎年その朗読配分を通して学ぶのです。

「主は来られる。地を裁くために来られる。」(詩 96:12) 生きている者と死んだ者を裁くために来られるキリスト(II テモ 4:1)は、また来るべき怒りから私たちを救ってくださる救い主(I テサ 1:10)であります。それゆえ大切なことは一つだけ(ルカ 10:42)です。それは、一人一人の信者がキリストに結ばれて新しく造られること(II コリ 5:17、ガラ 6:14-15)、キリストの血によって贖われ罪を赦されること(エフェ 1:7)、その信仰にしっかりと踏みとどまり、伝えられた福音の希望から離れないこと(コロ 1:23)なのです。

アーメン、ハレルヤ。

## 11月15日 年間第33主日

ダニ 12:1~3    ヘブ 10:11~18    マコ 13:24~32

### 1. マコ

v.29 「それと同じように、あなたがたは、これらのことが起こるのを見たら、人の子が戸口に近づいていると悟りなさい。」

v.32 「その日、その時は、だれも知らない。天使たちも子も知らない。父だけがご存じである。」

マルコ 13 章は 19 世紀以来、新約学者の間で“小黙示録”と呼ばれるようになり、多くの一般の読者にもそのような関心をもって読まれて来ました。しかし、それは単に外見上のことであって、終末に至るいろいろな出来事の順序を説明している“黙示文書”というようなものではありません。

むしろそこには、“その日はだれも知らない”ということが強調されていながら、しかも同時に、終末は近いという“時の徴”に注目するということへの、明確な緊張関係が存在します。いわば聖書学者はここで、神の“秘められた計画”(ロマ 16:25)に立ち入ることを禁じられているのです。

私たちキリスト信者が v.32 を軽視するなら、それは信仰の破綻に至ることでしょう。また、v.29 を古い時代の黙示文学の遺物のようなものと考えてしまうなら、私たちは聖書の終末論が現代に向かって語るメッセージに、耳を閉ざすこととなります。なぜなら“時の徴”は、私たちの歴史のただ中に再びキリストが来られることを、教会に思い起こさせるものだからです(ルカ 21:28)。

再臨のキリストは「大いなる力と栄光を帯びて」(v.26)来られます(8:38 参照)。今は「目に見えるものによらず、信仰によって歩んでいる」(II コリ 5:7)すべての信者が、その日には「御子をありのままに見る」(v.26、Iヨハ 3:2)ことでしょう。そしてキリスト御自身が、「選ばれた人たちを四方から呼び集める」(v.27)のです。決してキリスト教会が、人間の努力や能力によって地上に理想の世界を実現するものではありません。

そのような再臨のキリストが、「戸口に近づいていると悟りなさい」(v.29)と、私たちは呼びかけられています。フランシスコ会訳の「主はもうすぐ来られます」(フィリ 4:5)とその訳注\* は、現代の教会への慰めです。

\* これはおそらく初代教会の典礼式文の一表現であろう。… 栄光に輝くキリストの再臨を待ち望み、その再臨が間近いことをよく表した表現である。

### 2. ヘブ

vv.12-14 「しかしキリストは、罪のために唯一のいけにえを献げて、永遠に神の右の座に着き、……待ち続けておられます。なぜなら、キリストは唯一の献げ物によって、聖なる者とされた人たちを永遠に完全な者となさったからです。」

今から一時代前、W.F.Albright はその著書“石器時代からキリスト教まで”(第二バチカン公会議の啓示憲章にも大きな影響を与えた)の最後の章の結尾に、次のように記しました。“歴史学者は、キリストの秘め

られた計画の神殿の入り口で、立ち止まらなければならない。そこに入るには先ず靴を脱ぎ、歴史と自然の学問が通用しない領域、すなわち神が永遠の栄光の座から支配される世界があることを認めなければならないのである”と。

キリスト教信仰は、聖伝と聖書を通してキリストの福音を聞くことを軽んじては、成り立ちません。「実に、信仰は聞くことにより、しかも、キリストの言葉(福音)を聞くことによって始まるのです」(ロマ 10:17)。信者はそれぞれの能力に応じた仕方でも聖書を学ぶことが大切です。また、語学や神学も有益ではありますが、先ずキリストの福音への尊敬と信仰が前提になっていないと、“神の領域に土足で踏み込む”ことになってしまいます。なぜなら、聖伝と聖書を通して語られる神のことは、「聖なる者とされた人たち」(v.14)のためのものであるからです。

### 3. ダニ

「お前の民、あの書に記された人々」(v.1)、「目覚めた人々」(v.3)、「多くの者の救いとなった人々」(v.3)は、その日「とこしえに星と輝く」(v.3)ことを、教会は信じて待ち望んでいるのです。それは、信じて洗礼を受けた者(マコ 16:16)の群れである教会こそが、「いと高き者の聖者ら」「いと高き方の聖なる民」(7:18, 27)だからです。

「私たちキリスト者の国籍は天にあり、わたしたちはそこから来られる救い主、主イエズス・キリストを待ち望んでいるのです。」(フィリ 3:20/フランシスコ会訳) 「現に見ているものをだれがなお望むでしょうか。わたしたちは、目に見えないものを望んでいるなら、忍耐して待ち望むのです。」(ロマ 8:24-25)

アーメン、ハレルヤ。

# 11月22日 王であるキリスト

ダニ 7:13~14 黙 1:5~8 ヨハ 18:33~37

## 1. ヨハ

v.36 「イエスはお答えになった。“わたしの国は、この世には属していない。”」

原始教会はその信仰告白において、イエスが“ダビデの子孫から生まれた”(ロマ 1:3)ということ語り、福音書にも明白にそのことが述べられています(7:42、マタ 1:1,20、ルカ 2:4,11)。ところが不思議なことに新約聖書は、旧約の預言者たちが期待した“ダビデの子孫であるメシア”として、イエス・キリストを説明することには、かなり消極的なのです。むしろイエス自身が、それを全く否定するような発言をさえされたようで(マコ 12:35-37)、それは恐らくこの期待が、当時の過激なイスラエル国家再建運動と結びつくことを警戒したためと思われる(6:15 参照)。

ダビデの子であるイエスがダビデの町に、その約束されていた「父ダビデの王座」(ルカ 1:32)を受けるために着いたとき(マコ 11:10)、そこで受けたのは「門の外で苦難に遭う」(ヘブ 13:12)十字架の死でありました。

イエスがキリストであるとは、地上のあらゆる王よりも偉大な王であって(黙 19:16)、その支配は地上の一領域に限定されたりしないということ、  
「あなたは自分の考えで、そう言うのですか。それとも、ほかの者がわたしについて、あなたにそう言ったのですか」と、イエスがピラトに尋ねました。そうです。今朝、私たちすべてのキリスト者こそが、この問いかけをイエスから受けているのです。

イエス・キリストが王であるとは、今やすでに父なる神の右の座に着き(ヘブ 10:12)、天と地の一切の権能を授かって(マタ 28:18)支配しておられるということです(I ペト 3:22)。カトリック教会では毎年、典礼暦の最後の主日に、このことに心を向けてミサをささげます。そのことがすべての人に明らかになるには、主の再臨を待たねばなりません、私たちキリスト者は「目に見えるものによらず、信仰によって歩んでいるから……いつも心強い」(II コリ 5:6-8)のです。

## 2. 黙

vv.5-6 「わたしたちを愛し、御自分の血によって罪から解放してくださった方に、わたしたちを王とし、御自身の父である神に仕える祭司としてくださった方に、栄光と力が世々限りなくありますように、アーメン。」

カトリック教会では、成人の洗礼式の場合には直ちに堅信式が続きます。“この二つの秘跡が続いて行われることによって、キリストの死と復活、および聖霊降臨が、一つの過越の神秘として切り離すことの出来ないものであることが示される。”(カトリック儀式書) このようして、受洗者は「選ばれた民族、王室、祭司団、聖なる国民」(I ペト 2:9/フランシスコ会訳)となるのです。

キリストが王であることを信じるとは、洗礼の秘蹟によってキリストと共に復活させられ(コロ3:1)、その王の支配に参加する者(IIテモ2:12)、その王国の祭司(Iペト2:9)とされたことを信じることと一つです。キリストの教会は、聖なる者とされた人々の会衆なのです。そのことは、「見よ、その方が雲に乗って来られる。すべての人の目が彼を仰ぎ見る」(v.7)日に、明らかになることでしょう。

「今おられ、かつておられ、やがて来られる方」(v.8)に、賛美、誉れ、栄光がありますように。

### 3. ダニ

キリストは復活して天に昇り、父なる神から「権威、威光、王権を」(v.13)お受けになりました。私たちキリスト者は、このことを信じているからこそ、イエスの以下の言葉を理解することが出来ます。「驚いてはならない。時が来ると、墓の中にいる者は皆、人の子の声を聞き、善を行った者は復活して命を受けるために、悪を行った者は復活して裁きを受けるために出てくるのだ。」(ヨハ5:28)

私たちは「キリストの国」(ヨハ18:36)を、当時のユダヤ人たちがイスラエル国家再建運動と関連づけたように(ルカ24:21、使1:6)、人間が地上に築く理想の世界のことでもあるかのように、決して誤解してはなりません。王であるキリストは、地上の王の一人などではないからです。

天におられるわたしたちの父よ、み名が聖とされますように。み国が来ますように。

アーメン、ハレルヤ。



## 11月29日 待降節第一主日

エシ 33:14～16   Iテサ 3:12～4:2   ルカ 21:25～36

### 1. ルカ

v.27 「そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々を見る。このようなことが起こり始めたら、身を起こして頭を上げなさい。あなたがたの解放の 때가近いからだ。」

この御言葉と共に、新しい典礼暦の一年が始まります。私たちが実際に体験して来た現代のキリスト教会では、待降節第一主日に朗読される福音の特別に重要な役割が、殆ど無視されているのではないかという疑問を、否定することが出来ません。待降節第二主日から第四主日の福音は、すべて御子イエスのかつての誕生の追憶を主題としているので、第一主日の福音の主題を考慮に入れなければ、そこに出現するのは“美しいメルヒェン(おとぎ話)としての X'mas”です。実際、そうではなかったでしょうか。

第二～第四主日の聖書朗読、さらに一年間の聖書朗読全体の解釈の鍵としての役割を、古くからこの第一主日の福音は担って来ました。たとえ説教する司祭も、それを聞く会衆も、そのことに殆ど無関心であったとしても……、待降節第一主日の聖書朗読の主題はいつも“人の子の来臨”でありました。

キリスト教という宗教が、社会についても個人についても、最早そのほんの一部の領域にしか関与し得なくなった現代という時代に、信者たちばかりでなく司祭や司教たちまでもが、ミサで朗読される聖書が伝えるメッセージを本気で信じることをしなくなったという現実を、私たちは実際に見ています。

しかし、決して神は黙しておられるわけではありません。「わたしは、不従順で反抗する民に、一日中手を差し伸べた」(ロマ 10:21)とある通りです。“人の子の来臨”に関わることは、「世界に」(v.26)、「地の表のあらゆる所に住む人々すべてに襲いかかる」(v.35)のです。

この現実の歴史の中で、私たちの目に見えるものによらず、“大いなる力”(v.27)によって御自分の民をお集めになる再臨のキリストに希望を置くことが、聖伝と聖書によって守られて来た“カトリックの信仰”(アタナシオス信条 44\*)です。「神の言葉は生きており」(ヘブ 4:12)という現実の上に立つことをしない一切の“いわゆるキリスト教的活動”は、いかに人間的な愛と情熱に溢れていても、ただの無意味な“余計なこと”(IIテサ 3:11)でしかありません。

\*「これがカトリックの信仰である。これを忠実に確実に信じる者でなければ、救われることは出来ないのである。」

### 2. Iテサ

v.13 「そして、わたしたちの主イエスが、御自身に属するすべての聖なる者たちと共に来られるとき、あなたがたの心を強め、わたしたちの父である神の御前で、聖なる、非のうちどころのない者としてくださるように、アーメン。」

「神に喜ばれるためにどのように歩むべきか」(v.1)を学ぶのに、聖書に聞くのではなくて、社会や世界に

目を向けることが、多くの人の常識になっています。「あなたがたは、起ころうとしているこれらすべてのことから逃れて、人の子の前に立つことができるように、いつも目を覚まして祈りなさい」(ルカ 21:36)という福音書の言葉は、現代人にはもはや理解することも信じることも出来ない神話であるという説明が、まことしやかに語られているのです。そのようにして、現代のキリスト教会と信者たちの“信仰の力”は、まことに貧相なものになってしまいました。

普通の日本人にとって仏教のお経がそうであるように、カトリック教会のミサで朗読される聖書も“ただ唱えるだけ”の形式的なものになっており、当日の当番である聖書朗読者は自らその内容を理解することも、また神からの使信を会衆に伝えるという自覚も持ち合わせていないのが現実です。

それでも神は、聖書を通して、また典礼文や信条、そして聖歌を通して、確かに語っておられます。「その声は全地に響き渡り、その言葉は世界の果てにまで及び。」(ロマ 10:18) 私たちの主日のミサは、決して空しくはないのです。

### 3. エレ

「見よ、わたしが、イスラエルの家とユダの家に恵みの約束を果たす日が来る、と主は言われる」(v.14) との「新しい契約」(31:31)に、エレミヤの最後期の預言は到達しました。国家の滅亡、古来の民族の解体と共に、新しい教団としてのユダヤ民族の歴史が始まろうとしていました。しかしその預言はユダヤ教においては真に実現せず、その約束はイエス・キリストにおける新約の福音を待たねばなりませんでした。

キリスト者にとって、聖書を学ぶとは、救済史の神に感謝することです。「神の約束は、ことごとくこの方において“然り”となったからです。」(II コリ 1:20) このイエス・キリスト、すなわち“やがて来られるキリスト”(黙 1:4)の第一の来臨の追憶が、続く三主日と降誕節の主題なのです。

アーメン、ハレルヤ。